

留学生の批判的思考力育成を目指した ディベート活動

武田知子

0 実践の背景

日本語授業の時間を有効に使用できるよう、毎年1、2年生の留学生に学習に関するアンケートを行い、指導に役立てている。2006年度のアンケート結果（武田2006）によると、講義の聞き取り、ノートテイキング、発表については2年生になると問題を感じる学生が少なくなっていく様子が見られ、こうした技能が大学での講義を通じ向上することが伺われた。しかし、レポートについては、1年生の約9割が、2年生でも約7割の学生が困難に感じているという結果で、授業を受けているだけでは、レポート作成能力は向上できず、意識的な教育支援が必要なことがわかった。

アンケートで留学生があげたレポートが書けない理由は、日本語力の不足に加え、自分の考えや意見が出せない、論理的に意見を述べられないなどである。日々の授業でも留学生からは、レポートでいい評価をもらえるコツがわからない、本の内容が理解できても自分の意見が書けない、参考図書や資料の情報がうまく取捨選択できない、といった声をよく耳にする。レポートが書けない要因は、日本語能力だけではなく思考力の問題が大きいと思われる。そのため日本語授業では、日本語力と共に基本的な思考力を育成できるよう、問題発見解決学習を取り入れている。この問題発見解決学習とは、日本語を使っていかに問題を発見するか、その問題を考えていくか、批判的にとらえていくか、自分が考えたことを伝えていくかを中心にするトレーニ

ング（堀井2006）である。具体的には、授業で留学生が個々人の興味に沿ったテーマについて調べ、そこでの自分の発見をプレゼンテーションとレポートという形で他者に発表するという形で行っている。2006年からは、批判的思考力の育成を目指したアカデミック・ディベート（安藤他2002）を思考力のトレーニングとして取り入れ始めた。本稿では、なぜ留学生に批判的思考力が必要なのかを、2006年3月に行った新2年生対象のプレイスメント・テストの記述問題の結果を分析することによって示し、留学生の批判的思考力育成を目指したアカデミック・ディベートの実践報告を行う。

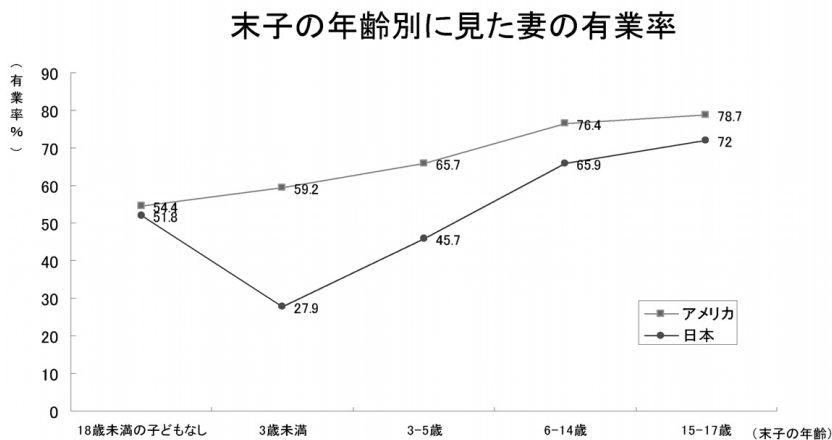
1 日本語プレイスメント・テスト

日本語プレイスメント・テストとは、日本語授業のクラス分けのテストで、毎年新学期が始まる3月末に行うものである。問題作成は留学生担当者が行い、新1年生に対しては基本的な日本語力を、新2年生に対しては1年次に行った授業内容がどこまで習得できているのかを測ることを目的に行っている。

新2年生への問題は、1年次に取り扱った『留学生のための論理的な文章の書き方』（二通信子・佐藤不二子）から出題している。このテキストは、実際にレポートを作成する際に下地になるような項目（文体、引用、段落、説明文、要約、比較等）で構成されており、非常に実践的である。このテキストからプレイスメント・テストへ出題することにより、レポートを書く基礎的な力を測ることができると考えられる。その中でも特に、グラフに基づき意見を述べるという問題は、物事を客観的に見る力、適切な根拠を元に意見を述べる力を測ることができる良問だと考え、2006年度のプレイスメント・テストの問題とした。

留学生への指示は、「次のグラフから出産育児が与える女性の就業への影響についてアメリカと日本の実情を比較し、特徴的だと思われる点について説明しなさい。その後、このグラフに表れた差がどのような要因によるものかあなたの考えを述べなさい。」というものである。出題のグラフ「末子の年齢別に見た妻の有業率」をグラフ1に示す。

グラフ1 「末子の年齢別に見た妻の有業率」（内閣府「平成13年度国民生活白書」より）



このグラフ1で読み取るべきポイントは、以下の3つである。

- (1) 18歳未満の子どもがいない女性の有業率は日本とアメリカ共に50%程度である
- (2) 3歳未満の子どもがいる日本の女性の有業率は急減し、アメリカとの差が開く
- (3) 3-5歳以上の子どものいる女性の有業率は日本もアメリカと同様上昇し、15-17歳の子どものいる女性の有業率は日本とアメリカ共に70%程度である

2 記述問題解答の分析

2-1 分析方法

2006年度3月に行った新2年生31名へのプレイスメント・テストの記述問題の解答を、表1コード例のように、グラフ1の読み取りポイントに従い、1から3までコードを付け分類した。2-2でグラフの特徴を説明する部分と要因を述べる部分についての解答を分析し、解答の全体像をまとめ

る。そして、2-3で具体例をあげながら、留学生の解答傾向を考察する。

表1 コード例

説明	日本の出産・育児が与える女性の就業率はアメリカと比べ全体的低い。特に3歳未満の子持ちの女性の就業率が一番低と思われる。(2) 子供の成長によって就業率が上がっていくのがわかる。(3) 就業率がアメリカと変わらないのは18歳未満の子供なしの女性である。(1)
要因述べ	日本は専業主婦が多く、特に子育ては女性だけやってる家庭が多いと思う。保育園も女性が働いている職場の近くにはあまりないので、とても影響されていると思う。(2)

*留学生の記述は、訂正せずにそのまま記載している

2-2 グラフの特徴説明と要因述べ

留学生が解答した記述を、2-1で上げた3つの分析ポイントでコード化したものを表2に示した。「出産育児が与える女性の就業への影響についてアメリカと日本の実情を比較し、特徴的だと思われる点について説明しなさい」への解答者数を「説明」に、「このグラフに表れた差がどのような要因によるものかあなたの考えを述べなさい」の解答者数を「要因」に記した。

表2 「グラフの特徴説明と要因述べ」

グラフの分析ポイント	説明	要因
(1) 18歳未満の子どもがいない女性の有業率は日本とアメリカ共に50%程度である	12	1
(2) 3歳未満の子どもがいる日本の女性の有業率は急減し、アメリカとの差が開く	31	31
(3) 3-5歳以上の子どもがいる女性の有業率は日本もアメリカと同様上昇し、15-17歳の子どもがいる女性の有業率は日本とアメリカ共に70%程度である	20	3

グラフの特徴説明で31名全員が触れていた分析ポイントは(2)「3歳未満の子どもがいる日本の女性の有業率は急減し、アメリカとの差が開く」であった。次に多いのは20名の(3)「3-5歳以上の子どもがいる女性の有

業率は日本もアメリカと同様上昇し、15-17歳の子どもがいる女性の有業率は日本とアメリカ共に70%程度である」である。(1)「18歳未満の子どもがいない女性の有業率は日本とアメリカ共に50%程度である」を説明していたのは12名で、全体の3分の1であった。グラフの分析ポイント(1)(2)(3)の3点をすべて説明できた留学生は31名中9名、(1)(2)の2点は3名、(2)(3)の2点は11名、(2)の1点のみは8名であった。

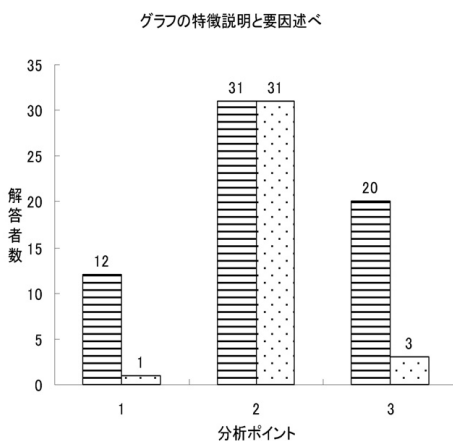
グラフの要因述べでは、31名全員が、(2)「3歳未満の子どもがいる日本の女性の有業率は急減し、アメリカとの差が開く」ことについて意見を述べていた。残りの2つの分析ポイントである(1)「18歳未満の子どもがいない女性の有業率は日本とアメリカ共に50%程度である」については1名が、(3)「3-5歳以上の子どもがいる女性の有業率は日本もアメリカと同様上昇し、15-17歳の子どもがいる女性の有業率は日本とアメリカ共に70%程度である」については3名が要因をあげていた。グラフの分析ポイント(1)(2)(3)すべての要因を述べた留学生は31名中1名のみ、(2)(3)の2点について述べた留学生は3名、(2)の1点のみについて述べた留学生が最も多く27名であった。

2-3 記述問題解答の傾向

グラフの特徴説明と要因述べ、それぞれの分析ポイントの解答者数を比較したものがグラフ2である。縦軸は解答者数、横軸はグラフの分析ポイントで、左はグラフの特徴説明、右は要因述べの解答者を示している。棒グラフ上の数は解答留学生実数である。

全体の傾向として、留学生の多くがグラフの読み取りで

グラフ2 「グラフの特徴説明と要因述べ」



は、(3) 子どもの年齢が高くなれば、仕事に就く女性が増えること、(1) 18歳未満の子どもがいない女性の有業率は日本とアメリカであまり差がないこと、に気がついてはいるものの、その要因を述べることができていることがわかる。なぜグラフ説明では指摘できているにも関わらず、その要因を推測し、意見を述べるできないのだろうか。また、31名全員が、(2) 3歳未満の子どもがいる場合日本の女性の有業率が急減することについて意見を述べているが、飛躍した意見が多く、説得力に欠けるものが目立っていた。以下、典型的な例をあげ詳しく論じる。

2-3-1 日本人は育児を大切にすること、専業主婦になることを要因としてあげた事例

例 1

説明	<p>グラフ「末子の年齢別にみた妻の有業率」によると、18歳未満の子どもを持つ妻の有業率は日本とアメリカだいたい同じけれども、少しアメリカのほうが高い。(1) 3歳未満の子どもを持つ妻の有業率はアメリカよりずっと低いけれど、アメリカは坂昇っているが、日本は下がった。(2) それから、3歳から17歳まで持つ妻の有業率が、日本よりアメリカは高いけれど、日本は徐々に上回ってきた。(3)</p>
要因	<p>日本だけではなく、東洋の人はすごく子供を大事にする習慣があることは違いの要因として考えられる。小さい子供を他人に預かってもらうことは絶対に許せない。特に小さい子供がいたら、お母さんのほうはもう専業主婦になって、一生懸命に家で育児と家事をする。日本の女が結婚したら、また、生産したら、仕事をやめて、専業主婦になるのも一つの要因だと思う。(2)</p>

例 2

説明	<p>上のグラフから見ると、3歳未満から5歳まで、女性の就業の差が非常に大きいことが分かる。(2) 子供たちの成長とともに、女性の有業率も増えて行った。(3)</p>
要因	<p>日本の女性たちは、家庭、育児のため、結婚する前に会社をやめ、主婦になる人が非常に多い。(2) 子供が大きくなったら、学費などのため、もう一回就業することになった。(3)</p>

例 1 は、3歳未満の子を持つ女性の有業率が低くなる理由として、東洋人は子どもを大切にすること、日本の女性は結婚後専業主婦になるという 2 点

を上げている。このように東洋人，日本人は子育てを大切にしていることを要因にあげた解答は8件あった。しかし，8件とも，なぜ女性が子どもを大事にすることが仕事をしないことに繋がるのかを明確にしていなかったため，適切な根拠になっていなかった。また，この解答の記述からは，アメリカ人は子どもを大事にしていないのかという疑問も湧いてくる。

2つの目の根拠の，日本人は結婚後仕事をやめ専業主婦になるという記述は，その後妻の有業率が徐々に上がっていくという事実と矛盾してしまっている。このように専業主婦になることを根拠としてあげる記述は12件みられたが，その専業主婦がなぜ(3)子どもが大きくなると徐々に仕事を始めるようになるのかについて意見を述べている解答は例2，1件のみであった。

2-3-2 日本とアメリカの女性の地位・役割・文化の違いを要因としてあげた事例

例1

説明	アメリカは、「有業率」がずっと続けているあまり多くの変化がないということが分れる。日本は「有業率」が3歳未満の子供がいる時一番低かった。(2) その後でだんだん高くなるということが分れる。(3)
要因	①昔から伝統の考えがあるから日本で女性の地位が低く，子供が生まれたり仕事しない ②アメリカの福祉事業が発達だから，女性は子供が生まれても平気に仕事ができる ③アメリカで男女同等だから差別がない(2)

例2

説明	日本とアメリカの有業率は子どもの年がおさないほど差が大きい。3さいみまんのときがいちばんはばが大きくて(2)，どんどん日本の場合，子どものが大きくなりながら有業率が高くなって，15～17さいの時は同じぐらいになる。(3) 日本のばあい，グラフのはばがおおきいが，アメリカのばあいははばがちいさい。
要因	でんとうてきで，日本の女の人はおとなしくて，男の言うことばをよくきき，このように子どもがてきると子どもの育児に気をつける。(2) でもさいきは，仕事をしながら家事も育児もよくてくる女の人がおおくなったし，子どもがとしをとると自らこうどうができるからこどものため，やめたしごとをまたはじめることになった。(3) アメリカはむかしより男と女がにびようどうだったから女に育児をぜんぶまかせることもなかったから女はこどもがてきてもずっとしごとがてきた。

例 3

説明	日本とアメリカは同じく、子どもの年齢が大きくなるにつれ、有業率が増える(3)が、しかし、日本の場合は、3才未満の子供をいる人と15~17才の子供をいる人の有業率が45%の差で、一方アメリカはその差がただ18%である。(2) したがってアメリカは日本より出産、育児は女性の就業への影響がない。
要因	違いの要因として、私が考えられることは、国による考え方だと思う。アメリカは個人主義が強い国だから、女性は結婚しても子供を産んでもちゃんと自分の仕事を持ちたい。一方、日本の場合は男の社会で、主人の給料で生活して行けるだし、女性側の方も昔から男に尽し、家族に尽しという考え方を持つ人が多いから結婚や出産になるやいなや仕事をやめる人が多い。(2)

例 4

説明	18未満の子供なしの女性は就業率は、日本とアメリカあまり差がないようです。(1) 出産・育児につれて、日本とアメリカの大きな変化がわかります。日本の場合は、育児のが優先で、有業率が大幅減のようです。(2) それに対して、アメリカは年をつれて、有業率も増えているようです。子供が大きくなればなるほど、日本の女性の就業率が高くなるのがわかります。(3)
要因	その違いの要因を考えられているのは、家庭や社会に対して、女性たちの考え方だと思います。日本の場合は、家庭のために、子供のために女性たちが自身の利益を考えない女性が多いです。アメリカの場合は自由の社会で、自分のために、なにかすることが多いと考えられています。(2)

例 1, 2 は, 3 歳未満の子を持つ女性の有業率の低さを「日本の女性の地位の低さ」「日本は男性の社会」「アメリカは男女平等」という言葉を用いて、社会における女性の地位を根拠に意見を述べている。しかし、例 1 のように根拠「社会的な地位が低い」と主張「子どもが生まれたら仕事をしない」の間の説明が十分でなく、社会における女性の地位の低さが有業率の差の適切な根拠となっていない。

例 3, 4 は、アメリカは個人主義、自由な社会、日本人女性は男性や家庭に尽くす、子どもを優先して自分の利益を考えない、といった文化的な違いを根拠に主張をしている。しかし、個人主義、自由な社会という語をどのような意味で使用しているのか定義はなく、グラフの特徴と自分の知っている知識を結びつけ意見を述べている様子が見られる。こうした「日本は、アメ

リカは、～である。」というステレオタイプのな根拠をあげた記述は全部で20件と最も多かった。しかし、(3)子どもの年齢が高くなれば、仕事に就く女性が増えることを考慮した解答は例2の1件のみであった。

2-4 考察

以上事例をあげて、グラフの読み取りでは見えている事柄が要因を述べる段階で消えてしまったり、矛盾する記述になってしまったりすることを示してきた。なぜこのようなことが起きるのであるのか。

福澤(2005)は、人々が同じ根拠を見ているにも関わらず、異なる解釈をしてしまう理由として、「根拠の中に唯一無二の意味があり、だれが探しに行っても、みんなが同じ意味を一義的に拾い上げるというわけではない」とし、「人は根拠の意味を見つけるのではなく、むしろ根拠へ自分から意味を付与するもの」と説明している。この指摘が正しいとすると、留学生はグラフで読み取ったことの意味を熟考し要因を推測していたのではなく、読み取ったことへ自分なりの意味を与え要因を述べていたことになる。

大学生を対象に論理的な文章について実験を行った道田(2001)は、大学生たちが文章を読む際、自分の好みや信念などに基づき、その結論を受け入れたり拒否したりという「信念バイアス⁽¹⁾」が生じていたと報告している。プレイズメント・テストを受けた留学生たちの解答は、「東洋人は子育てを大切にする。」「日本の女性は結婚したら仕事をやめて、専業主婦になる。」「日本で女性の地位は低い。」「アメリカは男女平等である。」「アメリカは個人主義の国だ。」などの偏った知識やステレオタイプのな見方によるものが多かった。信念バイアスゆえに、それと相反するグラフの特徴(18歳未満の子なしの女性の有業率、15歳以上の子を持つ女性の有業率)について、適切な推測をすることができなかつたと考えられる。

そうした信念バイアスから抜け出すためには、道田(2001)は批判的思考の訓練を繰り返すことが重要であるとしている。批判的思考の、批判とは無批判に物事を鵜呑みにせず、「問いを立てる」「疑問を持つ」「吟味する」というように物事に能動的に関わっていくこと(道田2003)であり、批

批判的思考力とは、「自ら学び，自ら考え，主体的に判断する力」「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下す力」（道田2001）だという。批判的思考力は，現在日本語授業で行っている，自分のテーマを発見し，調べ，発表するという問題発見解決学習の基礎となるものと考え，そのトレーニングのため授業にアカデミック・ディベートを取り入れることとした。

3 批判的思考力育成のためのアカデミック・ディベート

2006年秋学期より取り組んでいるアカデミック・ディベートの実践を報告する。アカデミック・ディベートとは，ある議題について肯定側，否定側に分かれ，論理的に議論を展開する活動で，自分の意見と切り離してスピーチを行なうことにより，批判的思考力を集中的にトレーニングできる活動（安藤他2002）である。日本語教育の実践報告はあまり多くはないが，話し言葉の練習や非母語話者教師研修の実践から，学習者自身の日本語力について見直す機会になり学習への動機付けとなった（館岡・斉木2003），他者の立場を自分のこととして経験することで自分の考えの意識化につながる，ディベートによって話す・聞く力だけでなく，準備段階での資料の読み，原稿やメモを準備する時の書きの活動の重要性も意識された（野山他1997）という報告がされている。

2006年度の議題は，新聞記事資料が集めやすく，どちらの立場でも十分な議論の余地がある議題「小学校から英語を必修化するべきである」と「代理出産を認めるべきである」とした。ディベートの構成は，参考にしたシナリオと同様に，肯定側立論，否定側質問，否定側立論，肯定側質問，否定側反駁，肯定側反駁（全国教室ディベート連盟編2003）で，全体で15分から20分程度の長さとした。

3-1 実践手順

2年生対象の日本事情（履修者8名）の授業において，5回（1コマ90分）をディベート活動に使用した。手順は，以下の通りである。

第1回目：①日常での議論を振り返る

- ②ディベートビデオを見て，ディベートの全体像をつかむ
- 第2回目：①ブレイン・ストーミング，主張と根拠の適切性について解説をする
- ②リンクマップ⁽²⁾の作成
- 第3回目：①リンクマップの作成続き
- ②くじ引きで肯定側，否定側を決定
- ③シナリオ作成
- 第4回目：①ディベートビデオを見て，ディベートの判定練習
- ②ディベート実施（評価シート記入）
- 第5回目：①ビデオをみて振り返り，話し合い
- ②ディベートアンケート記入

先行研究の非母語話者が準備なしにディベートをした場合の感情的な反発（野山他1997），論題がかみ合わない（館岡・斉木2003）という問題点を回避するため，ディベート実施前にシナリオを作成することとした。また，肯定側，否定側双方の立場で問題を考えさせるため，ディベートでどちらの側に立つのかはシナリオ作成直前まで決定しなかった。

3-2 実践結果

3-2-1 日常における議論

ディベートの準備段階で様々な角度から物事を見るという批判的思考を意識的にしてもらうため，授業中，話し合いの機会を多く設けた。まず，安藤他（2002）を参考に，日常生活における議論についてのアンケートを実施し，生活の中での議論について話し合った。話し合いの一部を文字に起こしたものを表3に示す。

表3 「日常の議論の振り返り：前髪についての議論？」

L：自分のことで（T：うんうん） 相手は、彼氏（T：おー） 内容は、前髪について
T：前髪について（笑い）、内容は前髪について！でどういいう？
L：あ、自分で切るか、（T：うんうん）美容室で切るか（T：はいはい。） このこと……。
T：で、Lさんはどっちが……
L：自分で。前髪はそんな難しいんじゃないことと思って、自分で切ったら……、目に邪魔しない（T：うんうん）するほうが良いと思って、切るか。彼氏は、美容室で、うー、切って、全体的できれいいくて（T：きれいで）
L：きれいになってる。うー。さい、結果は、自分、最後は、自分で・・・切ったけど……、でも……
T：じゃ、結果は、まあ、自分の意見を通した
L：うん、通した、切ったけど、でも……、やや不満（T：やや、不満？） うん、ふふ
T：あ、前髪を自分が……
L：失敗した
* L：留学生、T：教員

「日常生活での議論」という問いかけに対し、留学生Lは前髪を自分で切るか美容院で切るかで男友達と議論したことについて話し始める。しかし、最後は前髪を切って失敗し不満であったという感情的な話で終わっている。この話し合いから留学生が議論と口論の違いを理解していないこと、日常生活では議論をする機会があまりないことがわかった。そこで、議論とは主張と根拠が伴うものであること、大学ではしっかりと根拠を述べた上で意見を述べることを求められることを解説した。

3-2-2 ブレイン・ストーミングとリンクマップ

議論を多角的にとらえ批判的に思考するためには、アイデアを出すブレイン・ストーミングの段階が重要になる。そのため議題について留学生同士で話し合いをさせる前に、日常生活の身近な話題である「朝シャンプーをすることはいいか悪か」を議題とし、全員で賛成、反対それぞれの根拠をあげていった。話し合いの様子は表4に示す。

表4 「朝シャンプーについて賛成か反対か」

S：お金がかかる。
T：あつ、お金がかかる。朝シャンすると……。
学生：ええー
S：シャンプー代、水道代
学生：（笑い）
O：夜しないなら……。
S：シャンプー代、水道代、洗濯代、電気代、あの……洗剤代
T：あ～、じゃ、それは、朝シャン関係なく、頭を洗うと……。
S：頭洗って、水使うじゃん、シャンプー使うじゃん、タオル使うじゃん、あとタオル洗濯するじゃん、あと電気使う。
T：それ、でも夜でもそうですね。朝の問題だけじゃないですよ。
S：う……。それ、夜……。あの朝……。朝もシャンプーすると2回になるから。
T：あー、なるほど、なるほど。そういう……。デメリットとしては、例えばですね～。
もうちょっと説得力があるほうがいいんです。例えば夜の電気代のほうが朝より安いとかですね……。

* S、O：学生、T：教師

話し合いで出てきた、「朝シャンプーするとお金がかかる」という留学生Sの発言について、他の学生が「ええー」と声を上げたり、笑ったりしている。学生Oは「夜シャンプーしないならば、朝してもお金はかからないのではないか」と意義を唱えているが、留学生Sは自論を取り下げる様子はない。最後は教員が「夜でも電気代、水道代は同様にかかるため、これだけでは根拠として不十分である」と指摘している。このように意見とその根拠の適切性についての問いは、ディベート活動中繰り返し行い、留学生に問題意識を持って考えてもらえるよう試みた。

この話し合いの後、議題ごとに各4名の2グループを作り、グループで話し合い、リンクマップを作成した。参加留学生は全員中国人だったので、ブレイン・ストーミングは中国語で行ってよいとした。

リンクマップの作成は、ポストイットを利用して行った。まず、頭に浮かんだアイデアをポストイットに書いていき、アイデアが出尽くしたところで、内容が近いものでまとめていった。リンクマップが大方作成できたところで、肯定側、否定側に分かれシナリオ作成に取り掛かった。

3-2-3 ディベートの実施

ディベートでの主張、根拠の妥当性を判断することも批判的思考力の訓練になると考え、実施前にビデオを見て判定の練習を行った。判定には、勝ち負けとその判定の理由を書く評価シートを用い、判定結果に適切な根拠をつけるという訓練ができるようにした。

ディベートはシナリオに基づいて行われたため、先行研究であげられていた問題（感情的な反発、議論がかみ合わない）は見られなかったが、多くの学生がシナリオに頼りすぎ、視線が下向きになってしまったり、読み上げてしまったりという新たな問題が発生した。

授業後のアンケートでは、ディベート活動により「論理的に意見を言う方法が分かった」とする留学生は6名⁽³⁾中5名で、「自分の意見を言うだけでなく、聞く人が納得できる論理的な資料を集めることが大事だ」と、根拠の大切さに言及する留学生もいた。

4 まとめと今後の課題

留学生のプレイズメント・テストでの記述問題の解答を分析し、多くの留学生がグラフを読み取れてはいるものの、要因をあげて意見を論じる段階になると信念バイアスが生じ妥当な判断ができなくなっている様相を示した。その上で、批判的思考の訓練としてディベート活動の実践を報告した。

ディベート活動は、留学生に適切な主張と根拠について考える機会を与えることができたが、まだ不十分な点が多い。まず、批判的思考力の重要な訓練であるブレイン・ストーミングとリンクマップの作成時間が足りなかったことがある。作成時間を十分にとって、グループで完成したリンクマップを全員で検討する段階を入れる必要がある。また、リンクマップ作成時の留学生の話し合いのデータを収集しなかったため、どのような話し合いが行われていたのかを分析できなかった。今後の課題である。さらに、次回はシナリオに頼らずにディベートを行うことをルールとして決め、留学生に口頭発表の練習を課すことにしたい。今後も、実践研究を積み重ね、留学生の批判的思考力の育成について考えていきたい。

参考文献

- 安藤香織・田所真生子編（2002）『実践アカデミック・ディベートー批判的思考力を鍛える』ナカニシヤ出版
- 全国教室ディベート連盟編（2003）『中学・高校はじめてのディベート授業教科書を活用したディベートシナリオ集』学事出版
- 武田知子（2006）「大学1，2年次に在籍する留学生の学習活動上の困難点とその対処」『第15回小出記念日本語教育研究会予稿集』東京女子大学
- 館岡洋子・斉木ゆかり（2003）「ディベート授業の実践と意義－漢陽大学日本語研修講座におけるディベートー」東海大学紀要留学生教育センター 第23号
- 二通信子・佐藤不二子（2003）『留学生のための論理的な文章の書き方』スリエーネットワーク
- 野山浩・八田直美・古川嘉子・文野峯子（1997）「非母語話者教師研修における『聴解・口頭表現』授業の試みーディベート活動を通してー」日本語国際センター紀要 第7号
- 福澤一吉（2005）「論証と論拠」『論理表現のレッスン』生活人新書
- 堀井恵子（2006）「留学生初年次（日本語）教育をデザインする」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 道田泰司（2001）「批判的思考ーよりよい思考を求めて」『おもしろ思考のラボラトリー』北大路書房
- 道田泰司（2003）「『論理的である』とはどういうことか」井上優・宇佐美洋編『論理的文章作成能力の育成に向けて（日本語教育ブックレット5）』国立国語研究所

- (1) 推論の妥当性の判断が、結論と自分の信念との関係によって変わってしまうバイアス。結論が自分の信念に一致しないと、論理的に妥当な推論でも妥当でないとなす場合と、結論が自分の信念と一致すると

論理的に妥当でない推論も妥当であるとみなす場合とがある（道田2001）

- （2）ブレイン・ストーミングでのアイデアをまとめ、相互関係を矢印などの記号で示したもの（安藤他2001）
- （3）授業に参加した留学生は8名だが、アンケート実施日に欠席者が2名いたため回答者は6名であった

Developing Foreign Student's Critical Thinking Skills Through the Academic Debate

Tomoko Takeda

According to a questionnaire to foreign students, 90% of the first-year students and 70% of second-year students have problems in writing term papers. To become an expert writer, it is important to improve both Japanese ability and thinking skills. This paper explores a way to develop foreign students' critical thinking skills through the debate activity. The paper first examines the second-year students' essays of the placement test to see how they read a graph and explain it. Although many foreign students had pointed out features of the graph, they failed in explaining appropriate reasons for those features. Most of their reasons are very culturally biased. It is suggested that we must educate foreign students to break away from their fixed idea through Critical Thinking. The paper then describes the author's practice which aims to develop students' critical thinking skills through the academic debate. On the process of the preparation for the debate, foreign students had chances to discuss what the proper evidences are, how they can make arguments convincing. Students wrote the scenario of the debate reading different kinds of data. Finally, the problems and improvements on the practice are discussed.